



ピクタインダカン

(おさみがりにぼし)

第17号

発行日 2018年8月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

白鳥

太平川 光あふれる夏

翔べない白鳥

は小舟のように

今年も川のほとりに憩う

置き去りにされたかなしみは

虚ろな眼に

小さい不安の翳

となっている

それでも

傷ついた小舟は

本能の北をめざしているのだろうか

わたしも

ことばの川にただよう小舟

広い詩の海をめざして漕ぎつづける

濁黒 (KURO) VI

*

今度、転勤になりそうです
と医者がいう
仕方ないですね
とわたしはこたえた

十六年間に

主治医は何人もかわった
事故が遠くなるにしたがつて
医者は患者の症状に軽くふれ
カルテに書きとめていく

事故に出遭ってしまったわたしの
十六年の歳月は
他者の目には

かすんでみえる
抱えきれないほどの苦しさを
むなしさ……

*

わたしの健康を返せ
わたしの人生を返せ
わたしを……

でも

傷みから

わたしの詩が生まれ
わたしは強くなれた

*

時の流れだけが
わたしの思いを読みとっている
これから先
濁黒とどう向き合っていくのか

刻まれた黒い記憶を消し去れるのか

*

十六年ぶりに

はじめて

濁黒と

真正面から向きあう

*

濁黒を書く

軀に滲みこんだ濁黒を

吐く

蒸気機関車のように

黒い煙を吐く

とにかく吐ききるまで

一心不乱に書く

体調を崩そうが

眠れなくなろうが

とことん書きまくる

*

なにかに取りつかれたように

濁黒を書きすすめる

労災事故の資料は

すでに廃棄したのに

こんなにも深く

事故の翳が

わたしを取りこんでいたとは

細胞の一つひとつに

濁黒の記憶がしみ込んでいる

*

濁黒を書き進めるにつれ

十六年分の怒りが

筆圧を強くする

濁黒が

これほどまでに

躰に巣くっていたのか

*

詩を書くことで

わたしは

もう一度

濁黒におそ魔まわれている

不調……

濁黒の仕業だ

にがい涙なみだが流れる

*

濁黒を書くことは

自己暴露

詩のなかで

無一物のわたしが

泳いでいる

*

暮らしの波打ちぎわに

次々と這いあがつてくる不安の波

濁黒のなかに

生きられるだろうか

静しずかで強い

自分でいられるだろうか

*

深淵の闇が攪拌されると
静寂の地平に
亀裂が走る

*

なぜ
どうして
それで

……

容赦ない
矢継ぎ早の質問

棘がささる

抜く前に

魂が固まり

躰から力が抜けていく

脱ぎ捨てられない濁黒の翳
消し去れない記憶の重さ

かなしみの感情が
遅れて

立ちあがる

*

ひとは
形あるものを求める
しかし
見えないものは
見えるようには書けない
いまは

*

笑顔のないひとの

ささくれだつた言葉

阿修羅の形相

魂がすっかり萎え

不調をきたす

だが

事故を乗り越えた自信が

明日に向かわせる

聞き流す耳と

柔らかな顔で

わたしは野仏になる

*

魂をえぐる

するどい言葉

心の傷を癒やす

まるい言葉

おなじ言葉なのに

こんなにも違う

言葉のひびき

*

濁黒が死ぬとき

わたしは生きているだろうか

わたしのなかに棲んでいる

濁黒の貌は

いつも

醜い

*

わたしが死んでも
濁黒は困らない

*

青白い手で
心が攪拌されているとき
わたしには
雨音さえもとどかない

*

潮がひくように
まわりの人が遠ざかる
残ったのは
すえた言の葉

*

鋭い言葉は
魂を突き刺す刃

*

濁黒の誕生が
始まりなら
終わりもあるはず――

*

逆境が
わたしを変える
負けじ魂が
折れない心をつくる
あきらめない自分を
信じる

*

三月の

やさしい光の手で

雪消えがすすむ

やわらかい風が

水面に銀色のさざ波をたてる

きよらかな陽光が

水のうえに言の葉をちりばめ

水底の石の肩をなでる

そのとき

わたしの心に

少しずつ光が射してきて

清らかな光の波紋がひろがる

こころの底に沈む

虚無と記憶の重い石を

いつか

払いのけ

そして

彷徨いながらも生きるわたしを

垣間みた

*

一番のしあわせは

かけがえのない

普通のくらし

*

ひとのやさしさに

よろこびがこみあげてくる

やわらかいことばが

こころのひずみをうめる

そのことばの

ひかりのほうへ

まつすぐ

かおをあげる

*

あまりに長い

濁黒とのたたかい

自分の体験を

ことばに託す

見知らぬあなたに いつか

いつか届くように……

*

わたしの

心を編む糸が

詩

*

わたしの

足もとの大地は

詩

ことばと自由に交歓しあう

よろこびが

わたしを新しくする

*

閉ざされた凍土の地に

かすかな光が射しこむまで

濁黒とのたたかいは

終わらない

*

濁黒を書くことに

どれほどの意味があるのか

だれかの一助になりたい

その気持ちだけが

わたしを詩に向かわせている

*

苦しみのひとよ

わたしにはわかる

ほんとうの切なさを

通ったものでなければ

知りえない棘の道が

たったひとりでも

自分をわかってうとしてくれるひとの

言葉が

存在が

どれだけ力になるか

*

みずからを開いて

もがき苦しんだ魂の声を

外へ放出する

闇から這いだした声は

詩の地平に降り

種子となり根づく

飛べ

種子よ

清い光となつて

静謐のうえに

徒然のエチュード 15

①

I Q

知能指数

E Q

心の知能指数

O B A Q

おばさん指数

②

5回も寝ちゃった

カフェインが

4回も起こすんだもん！

③

テレビドラマで

浮気してきた夫が

(あなたは心の妻だから……

妻は叫ぶ

(どうせわたしは

心だけの妻よ！

④

きょうはダイニング万葉

あすは花の金曜

つぎは待望の土用の丑

いただきま〜す

【ご案内】

第四回「ピッタの会」詩の勉強会

講師に成田豊人氏（コーディネーター）、田口映氏、十田撓子氏をお迎えし、左記の通り鼎談を開催いたします。

ご参加をお待ちしております。

メインテーマは、「今詩を書く事とは」です。

記

- ①日時 九月三十日（日）
- ②時間 午後一時～三時半
- ③場所 あきた文学資料館
- ④料金 無料
- ⑤申込 参加希望者は、九月二十日（木）までに、矢代レイにご連絡下さい。

☎ 090・1935・1180

【あとがき】

「濁黒」は終盤に入った。

毎日が、事故の記憶と痛みと格闘する日々であった。長年苦しんできた濁黒と対峙することは、暗闇の時間と交わることもある。

黒い記憶の世界からわたしのもとを訪れることばは、苦しみでしか知り得ないことばである。それは、近くにあるようでもあり、遠くにあるようでもある。

そのことばで詩を書くことで、混沌とした不可視なものとの関わりに質的变化が生じてきたように感じられる。

今後も詩のちからを借りて、次のステージへ登っていききたい。

